

2区の調査成果 まとめ

室町時代（15～16世紀）の屋敷地

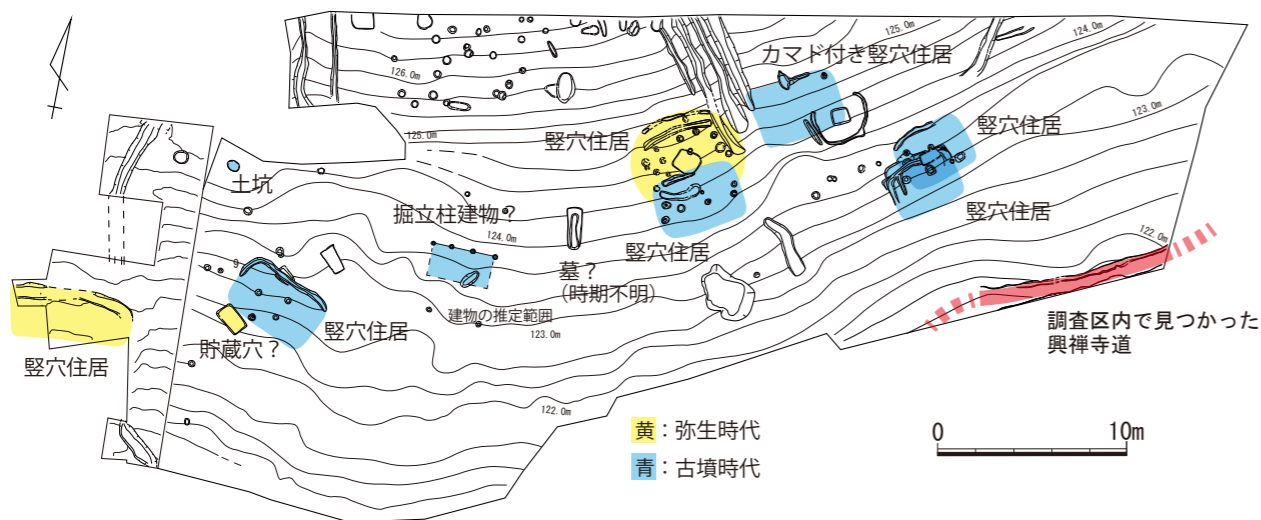
2区では、室町時代の屋敷地が良好な状態で見つかりました。丘陵を造成して作られたこの屋敷地は、南北幅約25mを溝によって区画し、雨水を処理したようです。屋敷地の北東側は低く谷が入りこんでいますが、造成時の土で埋めることなく排水に使うなど、元の地形をうまく利用していることがわかります。入口は南東側に想定でき、現在も一部で踏襲されている道（興禅寺道）へ通じたのかもしれませんが。それを裏付けるように、興禅寺道の下層から、古道の痕跡が見つっています。この屋敷地でみつかった掘立柱建物は、床面積から小型に分類されるもので、屋敷の主は周辺の農民をとりまとめる名主と呼ばれる立場にあったと考えられます。細片ながら茶道具である国産の天目茶碗や、中国製の青磁や白磁、染付の皿や椀が出土することから、その生活水準の高さをうかがい知ることができます。周辺では室町時代、嘉吉の乱（嘉吉元（1441）年、6代将軍足利義教が赤松満祐に暗殺された事件）に関連して皿山城が焼き落とされ、嵯峨山城や興禅寺も戦国期の争いのなかで焼失するなど、様々な歴史的事象がみられる地域で、その同時代に存続した興味深い遺跡といえます。

反面、造成による土地の改変により、それ以前の人々の生活を知る手がかりは限られたものとなりました。

1区の調査成果 まとめ

弥生時代中期（約2,000年前）、古墳時代後期（約1,500年前）の集落

1区では、弥生時代中期の竪穴住居を2軒、古墳時代後期の竪穴住居を5軒と掘立柱建物の可能性がある柱穴列などがみつかりました。これらの集落は、皿川に面した斜面地で見つっていますが、比較的傾斜の緩やかな場所を選んで暮らしていた様子がうかがえます。また、美咲町錦織へ通じる興善寺道（近世～現代）の作り方なども確認しました。（注：現地はすでに工事区域となり、見学することはできません）



第4図 1区の遺構配置図 (1/400)



高尾宮ノ前遺跡現地説明会資料

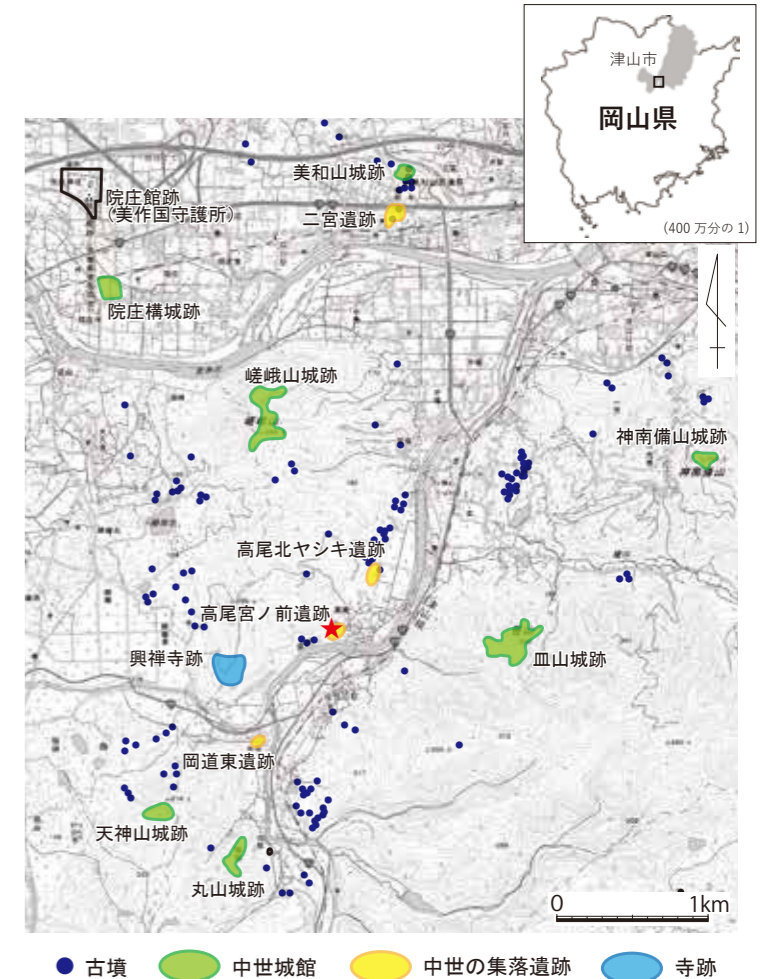
岡山県古代吉備文化財センター

はじめに

岡山県古代吉備文化財センターでは、一般国道53号改築工事に伴い、令和3年度から高尾宮ノ前遺跡の発掘調査を行っています。

高尾宮ノ前遺跡は、津山市街地の南西に位置する嵯峨山の丘陵端に立地しています。皿川を眼下に望み、県南との交通路として利用された津山往来を見据えています。周辺には古墳時代後期に作られた180基からなる佐良山古墳群が所在することでよく知られるところです。また、津山盆地への玄関口という場所からか、中世には城館跡が幾つも築かれ、文献からも南北朝期～室町時代の動乱の様子が垣間見える地域でもあります。

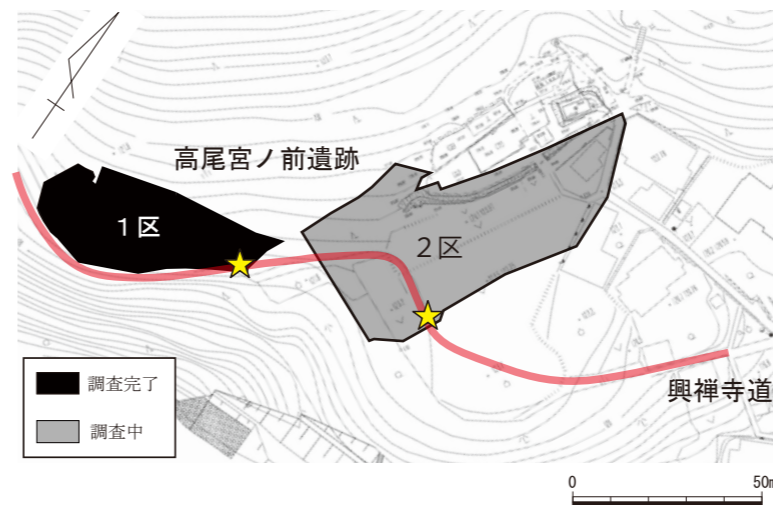
今年度の調査では、説明会場の2区では、縄文時代早期の人々の活動の痕跡や、古墳時代後期の掘立柱建物や墓の他、室町時代の屋敷地を良好な状態で確認しました。2区の南西に位置する1区では、弥生から古墳時代にかけての集落が見つかりましたが、残存状況はあまり良くありません。



第1図 調査地位置図 (1/50,000) ★印が調査地

周辺地域の室町時代の出来事

- 皿山城跡**
- 嘉吉元（1441）年、嘉吉の乱に関連して、石見の国人増田兼亮が「作州高尾代」を焼き落とすとして、細川持之から感状を与えられる。
 - 元亀年間（1570～73年）頃に荒神山城主、花房職秀に攻め取られる。
- 嵯峨山城跡**
- 赤松教弘の築城と伝わる（1400年前後か）
 - 天文年間（1532～55年）、尼子の臣である錦織利路が在城。
 - 元亀3（1572）年、焼失
- 興禅寺跡**
- 天文2（1533）年 嵯峨山城主錦織氏が再興
 - 元亀3（1572）年 嵯峨山城落城に伴い、焼失（1662年 現在の場所（美咲町錦織）に移転）



第2図 調査区配置図と興禅寺道 (近世以降) (1/2,000)

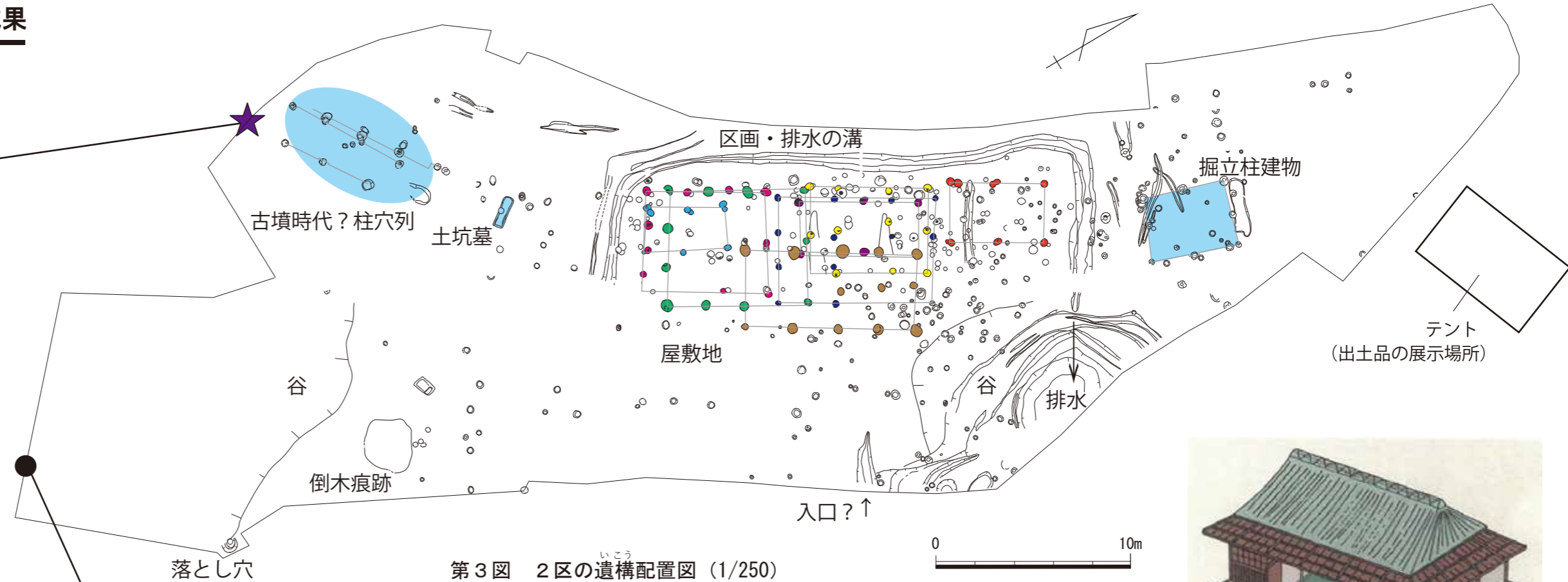
興禅寺道のルートについては、赤坂健太郎氏からのご教示による
★：調査区内で確認した地点

2区（現地説明会会場）の調査成果



縄文時代早期 約7千年～1万年前頃

サヌカイト製の石鏃（写真左）がみつかりました。周辺の丘陵で狩りを行っていたことがうかがえます。また、チャート製の異形部分磨製石器（写真右）と呼ばれる石鏃に似た形の祭祀具も出土しています（★印）。



第3図 2区の遺構配置図 (1/250)



どこうぼ 土坑墓



古道（中世段階?）の痕跡と興禅寺道



屋敷地（見つかった時の様子）



掘立柱建物の柱の残存状況



土坑墓に供えられた須恵器



掘立柱建物



屋敷地（建物の柱穴などを掘り下げた様子）



屋敷地に関連する出土品



総柱建物の想定復元図

引用：「東寺百合文書 世界記憶遺産登録記念 平成28年度特別展 新見荘～中世荘園の記憶～」 平成28年 岡山県立博物館

掘立柱建物の概要

| そうぼしら 総柱建物（3軒） | | | |
|----------------|---------|---------------------|--|
| ● 58 掘立柱建物 | 4 × 2 間 | 36.0 m ² | |
| ● 67 掘立柱建物 | 3 × 2 間 | 26.0 m ² | |
| ● 68 掘立柱建物 | 3 × 3 間 | 43.7 m ² | |
| がわぼしら 側柱建物（5軒） | | | |
| ● 53 掘立柱建物 | 3 × 2 間 | 32.8 m ² | |
| ● 54 掘立柱建物 | 2 × 1 間 | 8.8 m ² | |
| ● 57 掘立柱建物 | 3 × 3 間 | 43.0 m ² | |
| ● 69 掘立柱建物 | 2 × 1 間 | 14.9 m ² | |
| ● 78 掘立柱建物 | 2 × 1 間 | 19.8 m ² | |

（番号は調査時のもの）

古墳時代後期 6世紀後半～7世紀初め頃

掘立柱建物や土坑墓が見つかりました。周辺からはこの時期の土器が多く出土し、集落の広がりが想定できます。

土坑墓からは、須恵器と呼ばれる焼き物が4点出土しました。この墓に供えられたものと考えられます。

中世（室町～戦国時代） 15～16世紀

丘陵を造成して、屋敷地が作られました。区画と排水を兼ねた溝の内側に、8棟の掘立柱建物が重なってみつかったことから、建て替えを行っていたことが判ります。

建物の柱を据えた穴は深く、沈下を防ぐために、底に根石や礎板がみられるものもあります。総柱建物は床を張ったもので、住まいとして利用されたと考えられます。